

Title	「土左日記の読み方」 補遺正誤
Author(s)	山脇, 毅
Citation	語文. 1953, 8, p. 42-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68424
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

土左日記の読み方 補遺正誤

山 脇 毅

原田芳起氏の御示教によって増補する。熊本図書館に、上欄及び行間の書入れと附箋とを有する土左日記抄の刊本があった。書入附箋は上巻廿五丁表までで終って居るが、何人かが中島広足の書入附箋本を転記して功を終へなかつたものと思はれる。そのうち十丁表の「しらがぬものしかあしは」の所で、「しか」の左に「己カ也春臣」と註し、裏の註文の「しかとは然の字にや」の「然」の右に「いかゞ也古事記ニアリ春臣」と註し、上欄に、しかは助字なるべきかといふ説を挙げて、「広足云助字ト云説非也」と附記し、次に「春臣考古事記下いはの姫の御歌に、さしふのき、しがしたに、おひだてる、ゆつまつばき、しがはなの、てりいまし、しがはの……此三つのしが也是にて知るべし」と註して居る。広足は文久四年一月廿一日に七十三才で歿した。春臣はその前名である。書入附箋は大抵書物からの増註と考へられるが、真幸考、真幸按るに、真幸按、春臣按、春臣考、広足按、広足云とあるのは、広足がその師友長瀬夏幸や自分の説を何回にも記入したものであらう。「しか」を「己カ」と解する説は、前名になって居るから、改名以前のものである。

嘉永の頃、広足は、橋守部の土左日記舟の真路に附けた地図は正しいものかどうかと、土佐の早崎益に問うた。早崎も土左日記の地理を調べて居たので、この序にまとめようとしたが、忙しいので、之を鹿持雅澄に託した。雅澄は資料を受取って、死ぬ前年安政四年二月に土佐日記地理弁を書きあげ、松本弘蔭に地図を描かせた。早崎は之を受取って、弘蔭と共に考訂し、地図を弟に描きかへさせて広足に送った。広足は文久元年八月に序文を書き、同三年八月に出版した。之も死ぬ前年である。熊本図書館の土左日記抄は戦災で焼

失したが、土左日記に力を注いだ広足の書入附箋の念本が、どこかに残って居ないかと、ゆかしく思ふのである。
なほ池辺義象は、広足の歿した時四才であったが、広足と同じく熊本の人であるから、間接に広足の説を受けたのではないかと、原田芳起氏は想像して居られる。

広足の孫中島惟一の増補雅言事覽の巻頭の文に
祖父翁は云々、あしかちる難波にありしころ云々、旧の熊本の城しらす殿にふたゝひめさせられて云々、元治のはじめの年む月の末つかた遂に身まかられにけり
とあって、広足は安政三年から文久元年まで五年間大阪に滞留して居たから、住吉神社の主典であった小田清雄も、或はその間に広足の説を聞いたのかも知れない。之は私の想像である。

正 誤 表

頁	段	行	誤	正
二五	下	一六	国文	国文学
二六	下	一九	加ふるに	加ふるにも
二七	上	一八	祈る	折る
二七	下	二〇	酒落	酒落
二七	下	二一	土佐	土左
二七	下	二一	土佐	土左
二七	下	二一	準せ	準ぜ
二七	下	二一	ふらん	くふらん
二九	上	一六	証	燈
三〇	上	一七	まぎほる	まぎほる
三一	上	一七	異なる	異なる
三一	上	一七	ほか	ほかの
三一	上	一七	屋本	書屋本
三一	上	一七	ましを	ましものを
三一	上	一七	損した	模した
三一	上	一七	ぼろげ	ぼろげ
三一	上	一七	佐日記	左日記